

# 木村美保子夫人の思い出

——愛知県美術館を去るにあたり——

古田 浩俊

## はじめに

木村定三コレクションは木村定三氏が築き上げた一大コレクションである。生前木村氏は愛知県美術館にコレクションの一部を寄贈し始めていたが、氏の他界によって残されたコレクションは美保子夫人の手に委ねられた。定三氏の遺志を引き継いだ夫人は、それらをまとめて愛知県美術館に寄贈してくれた。愛知県美術館に木村定三コレクションがあるのは、このお二人のおかげであることは言うまでもない。

木村定三氏が他界してすでに20年以上が経ち、美保子夫人もご高齢である。筆者は木村定三氏とそのコレクションについて追想した文章をすでに書いているが<sup>1</sup>、木村定三コレクションの愛知県美術館への受入れに最初から最後まで関わった唯一の現職学芸員として、美保子夫人についても書き残しておくのが筆者の使命と考える。

個人的な話になるが、美保子夫人が筆者と同じく松本で育ったという点、筆者の母親と同じ昭和4年生まれという二つの点から夫人には特別な親近感をいだきつつ接してきた。これから記すことの中には、直接ご本人にお伺いしたこともあるし、同席者の一人として耳にしたこともある。多くは何年も前についての個人的な記憶に頼っているので、事実と異なる点があるかもしれない。あらかじめご了承ください。

## 美保子夫人の経歴

美保子夫人の経歴については筆者も詳しくは知らない。生まれたのは1929(昭和4)年、和歌山県と聞いたと記憶する。育ったのは長野県松本市で源池<sup>げんち</sup>小学校に通ったとご本人からお聞きした。松本尋常小学校源池部という校名で1904(明治37)年創設というから古い小学校である。かつては浅間温泉まで電車が通っていた松本の駅前通りをまっすぐ進むとあがたの森公園にぶつかる。そこを右に折れ、美ヶ原を源流とする薄川を渡る手前の左手に小学校は現在も位置する。



薄川 左端の建物は源池小学校、右端の山は美ヶ原

1 古田浩俊「木村定三コレクション追想」『愛知県美術館研究紀要 第28号 木村定三コレクション編』愛知県美術館、2022年、41-67頁。

お住まいも聞いたはずだがはっきりとは思い出せない。今の松本市美術館があるあたりだったような気がする。いずれにせよ市の中心部近くいわば市街地で育ったようだ。

高校は松本の女学校を出たという。松本高等女学校として1901（明治34）年開校の古い女学校である。現在は長野県松本蟻ヶ崎高等学校として1976（昭和51）年から共学となっている。男装の麗人川島芳子（愛新覺羅顯玕<sup>あいしんかくらけんし</sup>、1906－48年）が通ったことでも知られる学校である。

ご卒業後は松本の日本銀行で働いていたとお聞きしているが、その後のことはご本人から直接お聞きしたことはないのだからわからない。

## 定三氏の陰で

筆者が美保子夫人にはじめてお会いしたのは、定三氏から須田剋太の《東大寺》をはじめとする新たな寄託品を受け取りに行った2000（平成12）年4月13日である<sup>2</sup>。玄関で出迎えてくれて、控えの部屋にお茶と和菓子を出してくれたのが美保子夫人である。この時の夫人の記憶はまったく残っていない。定三氏の陰に隠れてまったく表舞台には顔を出さない陰のような存在であった。定三氏の生前には作品をお預かりするために何度もお宅を訪問しているが、まったく黒子に徹していた。そんな夫人を意識するようになったのは、定三氏が2003（平成15）年1月にお亡くなりになられてからのことである。

## 定三氏亡き後

定三氏の膨大なコレクションは美保子夫人が相続された。美術館にとってありがたかったことは、残されたコレクションを分散させることなくまとめて愛知県美術館にご寄贈いただいたことである。もちろん生前の定三氏もコレクションを分散させたくないという意向をお持ちだったようで、その遺志を引き継いだといえばその通りであるが、よくぞ遺志を引き継いでくださったという感謝の気持ちでいっぱいである。

定三氏が亡くなってから作品の受け取りに最初にお伺いした時、お香典などは受け取らずに届けられたものはお返ししているという話をお聞きした。定三氏の遺志によるのかはわからないが、いずれにしてもお返しするだけでもたいへん手間のかかる仕事だったはずである。

遺品の美術館への引き渡しで何度もご自宅を訪問する中で、次第に夫人と会話する機会も増えていった。ある日、作品を預かる作業をお宅の2階で行っていたのだが、階下から電話口でかなり強い口調で何かを断っている夫人の大きな声が聞こえてきた。それまで物静かなご婦人という印象しかもっていなかった筆者には、こんなにも強い面を持ち合わせていたのかとまったくの驚きであった。

作品の受け取りの際にお聞きした話の中でいちばん驚かされたのは、早寝早起きではなくて遅寝早起きの生活をしているということであった。定三氏がお亡くなりになられて、

2 古田、前掲、45-46頁。

処理しなくてはならない仕事は山ほどあったであろう。銀行に勤めていた経験がこんなときに役立ったのだと想像する。夜更けまで仕事をし、夜明けには起きるといほとんど寝ていないような状態でよく生きていられるなあと、お会いするたびに感心させられたものだ。

## 松本のこと

夫人が松本の出身ということを上司から聞かされていたが、自分も同郷だということを出し出す機会をしばらく逸していた。ある時、お宅に届け物をしなくてはならない要件ができた際にやっと自白できたことを覚えている。その後機会があるごとに松本の話をしたが、記憶に残っているのは、戦中に薄川に爆弾が落ちて大きな穴ができたという、筆者が両親からも聞いたことがない話だった。

松本へは長年戻っていないようだったので、筆者が帰省した後には現在の松本の様子をよくお伝えしていたが、その後妹さんと松本に行かれた話を聞くに及び、筆者も大変うれしく思った。

## メダカの話



旧木村定三氏邸宅の庭

ちからまち  
主税町の木村邸の母屋と倉の間にはちょっとした庭があり、池には水草が生えてオレンジ色のヒメメダカが元気に泳いでいた。美保子夫人が転居することになり、主税町の家屋やお倉もつぶすことになるという。メダカの池もつぶされると聞き、木村家の庭で幸せに生きていたたくさんのメダカがブルドーザーで生き埋めにされるのが可哀そうに思い、上司に頼んでメダカをもらえないか聞いてもらった。作品の受け渡しの際に、メダカの大きなエサの袋を見たことがあったので、夫人は毎日そのエサを与えていたのであろう。断られても仕方ないと思っていたが、うれしいことに上司からは10/28-11/3に引越しをするから早く取りに来るようにという内容の伝言をもらった。さっそく木村家を訪ねると、庭には家の片付けを手伝っていると思しき中年女性も一人いた。2006年10月22日のことである。夫人が網を貸してくれ、その中年女性と一緒にメダカを必死に掬った。夕暮れも迫っており、あまり時間を取るのも悪いと思い、たくさんのメダカを残したまま適当な時間で切り上げた。記念に写真を撮りたいと申し出ると夫人は喜んで応じてくれ、メダカと一緒に掬ってくれた女性にシャッターを押してもらった。池はそれなりに大きく、水草も繁茂していたので救い出せたのは一割にも満たなかったのではないだろうか。木村家の池にいたメダカは大人の小指ほど大きく立派で、美保子夫人もその



木村邸の庭にて美保子夫人と

ことを自慢げに話されていたことを思い出す。使っていない古い睡蓮鉢をいただき、それに取ったメダカを入れて自家用車で運んだ。当時筆者の長女が小学校4年生で、理科でメダカの雌雄の違いなどをちょうど習っていた。同じ学年の息子をもつN学芸員や同じくらいの息子をもつH学芸員にも救ったメダカを分けてあげた。その後、美保子夫人には何度かお目にかかったりお手紙を差し上げたりする機会があったが、その度ごとにいただいたメダカの現況を報告することになる。<sup>3</sup>

わが家ではいただいた睡蓮鉢を使ってメダカを飼っていた。最初の頃は毎年たくさんの針子が卵から孵り、娘たちと針子を取って別の容器に移すというのが春の年中行事であった。しかし、だんだんと数が減り始め、このままだと全滅してしまう危機的状況が何度かあり、その度ごとに新しいメダカを買ってきて子孫をつなげてきた。現在のメダカは何世代目になるのかわからないが、木村邸の池で暮らしていたメダカのDNAはしっかりと受け継いでいる。メダカは筆者と木村家、美保子夫人を時空を超えて現在も結び付けてくれている。

## 引越しとその後

引越しにあたり業者を紹介してもらいたいと頼まれた上司は、定三氏が存命中に重い石仏などを2階から降ろす作業を行った経験のあるK氏を紹介した。実際にK氏が中心になって引越しを主導したようで、その後K氏に会うごとに「おばあちゃんは元気か」と尋ねられた。

美保子夫人が埼玉で暮らす妹さんの近くに転居されてから、新居へは数回お邪魔させていただいた。玄関脇には主税町のお宅の入口に立っていた石像が移されていた。ある時は訪問時間がお昼時にかかってしまい、美保子夫人が出前を取ってくれて、二人で店屋物をいただいたこともあった。

## 桑原さん

ある時、作事中に美保子夫人からの電話を受けた。桑原さんから須田剋太の作品を愛知県美術館に寄贈したいという相談を受けたとの内容であった。桑原さんというのは木村さ

3 データが残っていた手紙の一部を恥ずかしながら抜粋する。

木村家からいただいたメダカが卵を生み、孵化して蚊のように小さな稚魚が生まれています。一緒にしておくとお親が食べてしまうので、休日に小学校2年生の娘〔次女（筆者注）〕と稚魚をすくっては別の入れ物に移す「メダカ採り」を楽しんでいます。すでに20匹くらいは採りました。(2007年6月3日付)

このころの寒さで、木村家からいただいたメダカの子孫たちも水面に顔を出すことがほとんどなくなりました。毎朝の餌やりが日課の私としては、寂しい季節になりました。(2012年1月25日付)

んのお宅のすぐ近くにあった桑原商店の奥さんで、木村コレクションをお預かりに伺った最初の頃に、ご遺族にお渡しする預かった作品のリストのコピーをこの桑原商店で何度かとらせてもらったことがあったので、まんざら知らない人というわけではなかった。また、美保子夫人が埼玉に引っ越してからも病院に通うためにたまに名古屋にいらっしゃることがあり、美術館を訪れる前に桑原さんと会ってきたというような話を聞いたことがあったので、ご近所付き合いという以上の付き合いがあったのだらうと思ったものである。美保子夫人の電話を受けた後、桑原さんに連絡を取り、美術館から歩いてゆける距離のお住まいを訪れた。寄贈の手続きについて説明しつつ、近況なども伺った。商店はすでに廃業しており、ご主人もすでに他界しているとのことで、作品は木村定三さんに勧められてご主人が購入されたものだという。当館と木村氏との関係、木村氏と須田剋太との関係からすれば、喜んで受贈するような案件であった。

## 終わりに

用事があって県庁に行ったりそこから帰ったりする際に、少し回り道をして木村さんのお宅のあった場所に足を運ぶことがある。池にメダカが泳いでいた主税町の木村氏のお宅が建っていた場所は、更地になって美保子夫人の転居後しばらくは駐車場になっていたが、その後大きなマンションが建ち、今や往時の面影は偲ぶべくもない。筆者は現在の情景を眺めながら往時の姿を想像して一人懐かしむのである。ここに母屋があって、ここに倉が並んでいて…。現在そこに暮らす人たちは、かつてそこに木村定三という大コレクターのお住まいがあって、そのコレクションは現在愛知県美術館が所蔵しているなどということはまったく知らないであろう。そのマンションを見上げるたびに、ヘラクレイトスの言葉“Πάντα ῥεῖ (万物は流転する)”が脳裏をよぎる。



木村邸が建っていた一角  
2024年9月26日撮影

愛知県美術館研究紀要 第31号 木村定三コレクション編

2025年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

The logo for the Aichi Prefectural Museum of Art, featuring the lowercase letters 'aomaa' in a stylized font. Below the letters, the full name 'aichi prefectural museum of art' is written in a smaller, lowercase font.

制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.31

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2025

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.

© 2025 Aichi Prefectural Museum of Art, All Rights Reserved.